

日本災害復興学会 「復興とは」委員会
第6回委員会議事録

- 日時：2009年10月10日 14:00～17:00
- 開催場所：関西学院大学梅田キャンパス
- 会の名称：「復興とは何か」を考える委員会
- 主催：関西学院大学災害復興制度研究所、日本災害復興学会
- 参加者：塩崎賢明（神戸大学）、上村靖司（長岡技術科学大学）、永松伸吾（人と防災未来センター）、室崎益輝（関西学院大学）、魚住由紀（フリーアナウンサー）、山田聰亮（京都大学）ほか
- 報告者：塩崎賢明（神戸大学）、上村靖司（長岡技術科学大学）、

○神戸大学 塩崎教授

- ・「創造的復興」への疑問・・・「創造的＝もとにもどすだけではだめ」は本当か。自分が望まない形で住まいがかわった結果（劣悪住環境）、孤独死が多くなっている。被災者を孤立させない住宅（芦屋若宮 築地等）原地自力再建があってもよい。
- ・「復興災害」復興の過程で被害がでるのを防ぐことを考えるべき
- ・災害復興のまちづくりは、被災者の生活の場の回復を第一義に考えるべき。機能回復のための必要最小限の開発で良いはず
- ・住宅復興は単線型プログラム（避難所 仮設住宅 復興公営住宅）そこから漏れている被災者の支援が少ない
- ・事前復興も現在の都市計画の制度を前提としたものではないのではないか

議論

魚住 孤独死は被災地で突出しているのか。

塩崎 人の多さよりも、復興のプロセスのなかで孤独死の原因ができたという意味が問題

永松 「もとにもどすのが復興だ」と発言した人はこの委員会ではじめてだが、発言通り受け取っても良いのか。

塩崎 被災者全員がもとに戻った上で、その一部がよくなるのはいいが、一部がよくなって、一部がもとにさえもどらないというのが問題だということ。

室崎：ある程度の基準（元の生活水準）を皆がクリアするということは、復興の十分条件ではないにせよ、必要条件であるはずだ。

永松 復興は減災サイクルの一部であるという認識か

塩崎 それはそう思う。だが、災害があったから「それチャンスだ」として防災性を高め

るといふ建前のもと大開発を行うことが良いというわけではない。復興はとりあえずもとにもどして、そのあと日常の生活の中で防災をやっていけばよい。

室崎：防災をビジネスチャンスとしてバブルになるから「安全」がきらわれる。木造密集市街地の路地は安全な装置 密集地をコンクリートジャングルにすることがよいわけではない 安全な路地裏をどうつくるか

○長岡技術科学大学 上村先生

・私は中越の復興しか知らないので、それを前提にお話させてもらう。中越は震災前のトレンドはすでに右肩下がり。その中で「復興ってなに？」を考えた。

・「復興とは人々が同じ目的で何かをやっていること」のイメージ。室崎先生から「物語復興」について教わり、アメリカのサンタクルーズにあるということで行ってみた。結果的に「物語復興」と呼べるものは見つからなかったが、「Civic Living Room」というコンセプトで町の復興が合意され実施されていった。「物語はそこにある」と言われ腑に落ちた。

・災害は発災前のトレンドを加速させる。子供や孫の住む将来を話し合う以外に会議をすすめる方法はなかった

・復興基金のメニューの中で「地域復興デザイン策定支援」というのがあり、その中で「復興熟度」という言葉が用いられた。ここから復興熟度を測る必要性が生じた。

・復興とは、「社会（被災者コミュニティ）の健全性を取り戻すこと」

・復興とは健全さの回復＝新たな持続可能性の獲得

・復興は複雑系だ 複雑系と自己組織化 局所的な複数の相互作用

・これまでは、ヒトの都合の良いように環境を適応させてきた。これからはヒトビトが環境の変化に適応できる能力を獲得する必要がある。

・中越の集落の中には確実に消えていくものはあるだろう。しかし、フロントランナーは依存心が抜けてきている。

討論

永松 コミュニティの復興の議論としては良く理解できるが、一国全体の視点から、その地域をどう復興させるのか、という議論もあるはずだ。復興制度をつくっていくマクロな視点と被災者コミュニティ支援のミクロの視点によって次元が違う。

上村 今の活動の先のビジョンの問題。中越という圏域としての大きな流れをどうするかは次のステージの課題。

室崎 グローバルな復興（世直し、しくみなおし）とローカルな復興（立ち上がる）の二重構造。ビジョン論（目標など）の復興とメカニズム論（複雑系など）の復興の2つがあって、物語復興とはその2つをつなぐものだとして理解している。

菅 自然災害の後でなくても、地域再生としての「復興」の方法論としても、整理された

ものがつかえるのではないか。